エビソード　漫画少年の描いた虹の放物線

ー戦後に芽生えた長府版トキワ荘の夢ー

武部忠夫（元・劇団海峡座代表）

昭和20年代後半、長府安養寺の一隅に和風建築の大きな邸宅があった。 その屋敷の二階は、豊浦高校などの学生の下稲を受け入れていた。ずっとあとで知ったことだが、そこにひとりの高校を出たばかりの漫画少年が下宿していた。正確には、イラストレーターにあこがれをもつ少年だった。食うや食わずの戦後の暮らしの中で、まだ漫画の世界はほんの片隅の存在でしかなかったから、単なる漫画好きの少年がいたに過ぎなかった、というのが周囲の記憶だった。 少年は、近くの社宅に住む同好の少年と意気投合し、少年漫画集団の結成を夢見ていた。二人の少年が交換した、当時のイラスト入りの絵手紙が丁寧に保存 されている。ひとりは、現・二科会デザイン部審査員、アルファデザイン顧問の新屋幸彦。もうひとりは東京在住、スタジオ・ゼロ社長の鈴木伸一である。〔編註：所属はいずれも当時〕

長府時代のふたりは、苛酷な戦争をくぐってきた少年たちだった。二人とも、波乱をこえて祖国にたどりついた引揚体験者である。鈴木一家は、旧満州から長崎を経て長府へ。新屋は 朝鮮半島一山（イッサン・今の北朝鮮）がら帰国して,伯母のいる萩市に住んだ。戦後の少年たちの心を揺さぶった『漫画少年』誌の創刊が昭和22年暮れだがら、ちょうど中学時代の彼らを雀躍させたにちがいない。新屋は文字通りマンガ少年になって投稿に熱中、萩商高在学中には、すでに神戸の業界紙、阿武町広報紙に連載漫画を描いている。そのころ『漫画少年』の投稿仲間で才能を知り、格別の親近感をいだいていたのが、長府に住む鈴木伸一だった。保存された絵手紙というのは、当時の萩と長府を往復した2円の官製はがきである。

新屋は高校を卒業すると、一直線に下関の印刷会社瞬報社に就職した。鈴木伸一が居たからである。そして冒頭に書いた大きな屋敷の離れに下宿したのだ。ぼくは高校時代、あの安養寺の下宿に先蜚を訪ねたりして何度が足を運んでいたがら、妙に大人っぽいバンカラと闊達な稚気の漂う雰囲気が印象に残っている。のちにその下宿を舞台にした新屋と鈴木の交流は「下関漫画集団」として新聞記事になったにとが

ある。記事の中に、たしか「長府にもあったトキワ荘物語」という表現があった。 それは決してこじつけでも誇張でもながったのだ。じっさい新屋の下宿には鈴木がよく訪ねてきた。二人が中心になり、集まってくる漫画志向の仲間たちと作品を見せ台い、漫画を諭じ合った昭和 20 年代後半、長府の町は戦災を免れ、中心地の大火があったものの、安養寺辺りは閑散として空き地も広がり、人影まばらな静がな町だった。

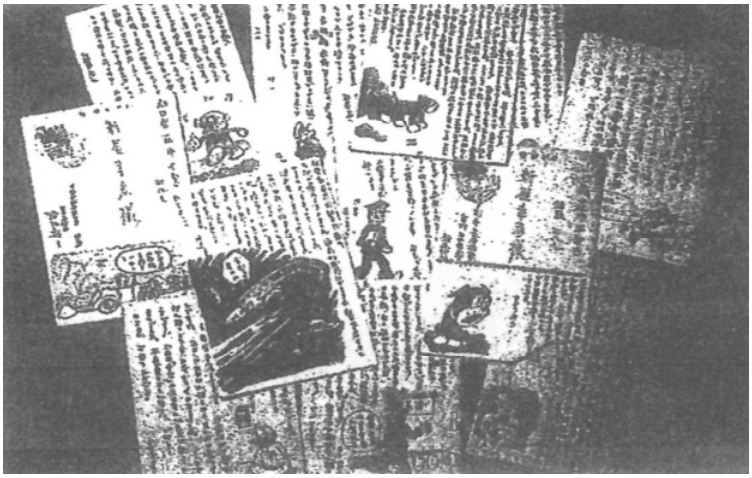
戦後 10 年。その静かな町から、ひとりの漫画少年が飛び立った(いや青年というべきだが)。鈴木伸一は横山隆一に師事するため、退路を断つようにして上京、椎名町・伝説のトキワ荘に暮らすことになるのである。『トキワ荘の時代』(梶井純著)に 昭和 30 年「鈴木が入居した日」の貴重な記念写真が掲載されている。左に寺田ヒロオ、右に我孫子素雄の路地裏のスリー・ショットである。「トキワ荘」はご存知のとおり、手塚治虫を中心とする漫画作家たちのラボであり、メッカであり、その後の日本漫画界の源流となる伝説の場所だった。遠距離を余儀なくされたが、長府・安養寺の下宿で交流した新屋は下関に踏 みとどまり、印刷会社に勤め、ひたすらデザイナーへの志を紡 く。一方、トキワ荘に移った鈴木は多才な仲間たちと東京の舞台で、漫画・アニメ制作の道を急ぐ。もちろん、新屋と鈴木の 熱い交友は今も続いている。名実ともにグラフィック・デザイナーとして西日本のパイオニアとなった新屋のテレビ取材に、鈴木は喜んで帰郷、肩を寄せ合い取材に応じている。

新屋幸彦のデザイン界の歩みは決して平坦ではなかった。昭和初期に芽吹いたデザイン・マインドが戦時体制によって封殺された不幸な歴史は、花森安治など先駆者たちの足跡がらも推察される。イラストは戦時一色になり、コピーは国民を一色にするスローガンの横行だった。田河水泡の『のらくろ』さえも 発禁になる時代があった。戦争が終わって、新聞も出版も印刷業界も、紙不足と機器の設置に歳月を費やし、復興に時間がかかった。三大新聞の夕刊が復活するのは、戦後も 5 年経ってが らである。新屋がデザイナーの道として就職した瞬報社は高度な技術スタッフを擁していたが、状況は厳しく、とくにデザインは図案職工時代で独自の腕をふるう機会はまだ少なかった。 新屋は勤務のがたわら、東郷青児の二科会に入選を果たし、デザイン仲間を集めた。いわば少年漫画集団の青年版である。昭和 30 年代後期、山口商業美術協会を結成、各自手弁当で下関駅の一等待合室の壁面を使って市民にデザインをアピールした。この「山商美」美術展は、デザインの認知と啓発を促し、デザイナー

の卵たちの研鑽の場でもあった。のちに新屋が立ち上げたアルファデザインは盟友アロー印刷社長、堀川伝夫の助力もあり、西日本一円の業界に自立したデザイン・マインドの存在感を発信した。その後の活動は言い尽くせないが、新屋が塾長となり、当時の「下関ガス」が設置した「デザイン・ルーム」は、若い人たちに画期的な影響を与えた。第一期生には、俊英の三戸光顕がいた。

東京で活躍する鈴木伸一は、トキワ荘からアニメ界に転身、スタジオ・ゼロの初代社長となる。赤塚不二夫、藤子不二雄らが仕事仲間だった。主なアニメ作品は『プラス5万年』『トキワ 荘青春物語』ほか多数。現在、毎日映画コンクールなどのアニ メ部門の審査委員でもある。

それにしても、日本の漫画界で活躍する下関ゆかりの作家た ちの多彩なことに驚く。トキワ荘作家たちの証言者でもある水野英子(『ファイヤー！』)、青池保子(『エロイカより愛をこめて』)、文月今日子(『わんぱくグリーンタウン』)と、若き時代の少年少女たちが今も虹の糸車を紡いでいる。(潤)



鈴木伸一から新屋幸彦に宛てた絵手紙の一部
(昭和25年頃)